

1月16日 年間第2主日

サム上 3:1～10,19 Iコリ 6:12～20 ヨハ 1:35～42

1. Iコリ

年間に入りました。年間は先週の月曜日から始まって、今日からが第二週なので、年間第二主日なのです。年間には第一主日がありません。今年は四旬節に入るまでに、7回の年間主日があります。

特別な祭り結びつかない期節……それが年間です。この期節には私たちは、自分たちミサをささげる群である教会のことを、キリストの神秘全体の中で考えます。

vv.12-13a

私たちは、自分がどのように生き、歩むか……について、全く自由であり、自らの責任のもとに生きることが許されています。しかし、キリストの救いを受けた人々は、その救いが、その人の歩みと人生を支配するのです。そこにあるのは、「信仰か、それともキリストに背を向けるか」の二者択一です。

vv.14-15a

私たち一人一人は、神の国への復活を目指して歩んでいるのです。キリストと共に神の国を受け継ぐためです。そしてミサをささげる人々は、さらにこのことを個人としてではなくて、群として、会衆として考えるようにと呼びかけられているのです(vv.19-20)。ここで「あなたがた」と複数形になっていることに注意しましょう。切り離された個人ではなくて、共にミサをささげている会衆に向かって聖書は語りかけているのです！

ミサをささげることは、御子イエスキリストのいけにえの奉獻に、私たちが一つに結ばれることです。ですからミサに参加する人は、また群のための奉仕にも参加します。それには信仰深い備えが大切です。各々よい備えをもって奉獻と奉仕に参加しましょう(v.20)。ミサをささげるすべての信徒に、そのような奉獻と奉仕が求められています(参照：カトリック要理 p.75「信徒使徒職」)。

2.

私たちはみな、普通の人です。しかし聖書の中には、そのような私たちの奉獻と奉仕の手本となり、またその深い意味の理解を助けてくれる、使徒や預言者たちの召しの物語りが満ちています。それらの中から、今日私たちは二つの物語りに目を向けるようにと招かれています。

① ヨハネ

vv.35～39 ヨハネの証しによって、ヨハネの二人の弟子がイエスについて行って、イエスの弟子になりました。“ちょっと立ち話し……”ではなくて、このかたから神の国の福音のすべてを聞くために、二人はイエスのもとに泊まったのです。

これは推測ですが、この二人のうちの一は、ヨハネだった可能性があります。ヨハネ福音書はこの使

徒ヨハネの証言に基づいています(ヨハ21:24)。そして今朝のテキストの部分は、そのヨハネの目撃証言に拠っているように思われるのです。

アンデレは自分の兄弟シモンに、「わたしたちはメシアに出会った」と言って、彼をイエスのところに連れて行きました。イエスは彼を見つめて、「あなたをケファ(アラム語で“岩”…ギリシア語に直すとペトロになる)と呼ぶことにする」と言われました。

ヨハネ福音書が出来上がった一世紀末近くの頃の教会で、“ペトロを土台として教会が建てられている”という理解は、既に広く受け入れられていました。そしてそのような理解は、決して後から徐々に作られたのではなく、彼の最初の召しにおいてイエスがそう定めてくださったことだったと、このテキストは証言しているのです。ここに、一人一人への主の召しの特殊性があります。そして事実、ペトロへのこの召しは、十分に教会の形成の中に役立てられたのでした。

② サム上

v.10 「主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれた。“サムエルよ。”サムエルは答えた。“どうぞお話しください。僕は聞いております。”」

サムエルは神の言葉を聞き、預言者として召されました。神が彼に特別な召しを与えられたのです。そして彼は、神の救済史の中で十分に役立てられるのです(v.19)。

「そのころ、主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった……」と言われているそんな時代のただ中で、神は預言者サムエルを召し出されました。

3.

ミサをささげる信徒一人一人にも、それぞれ神から奉獻と奉仕が求められています。ミサに参加する人は、また群のための奉仕にも参加するようにと招かれています。ミサをささげることは、御子イエスキリストのいけにえの奉獻に、私たちが一つに結ばれることだからです。信仰深いよい備えをもって奉獻と奉仕に参加しましょう(1コリ6:20)。 ハレルヤ、アーメン。

1月23日 年間第3主日

ヨナ 3:1~10 Iコリ 7:29~31 マコ 1:14~20

1. マコ

w.14-15 私たちの福音は、神の国の福音です。救い主イエス・キリストによって、神の国の福音が教会に委ねられました。今や「時は満ち、神の国は近づい」ています。ですから今の時代は「悔い改めて福音を信じ」る時なのです。これは神の国の福音ですから、代々の教会は諸世紀を通して、イエス・キリストの再臨と私たち救われた人々の復活に期待して、感謝の祭儀を守って来たのです。

今朝もミサの中で聖書が朗読され、こうしてその解き明かしである説教が語られるのは、この聖書に語られている神の国の福音への信仰を、教会が今日に至るまで受け継いで来ているからです。

多くの人々は、歴史を経て時代は変わり、人間の思想や価値観も時代とともに変わって来た……と考えています。しかし教会はいつの時代にも、この神の国の福音によって教会であり続けて来たのであって、その福音と信仰が新約聖書の時代といささかも変化しないように、使徒継承というものを大切に出来て来ました。ですから今朝のマルコ福音書の言葉は、今朝ここに集まっている私たちにももう一度新たに語りかけているのです。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」

2. Iコリ

使徒パウロはコリントの教会の人々に宛てた手紙の中で、こう語りました。「兄弟たち、わたしはこう言いたい。定められた時は迫っています。……この世の有様は過ぎ去るからです。」(w.29,31) イエス・キリストが終末の審判者として再び来てくださり、救われて聖なる者とされた人々に神の国を受け継がせてくださる日への期待が、当時の教会には満ちていました。

そして、最初の人々が考えたようには直ぐに終末が訪れなくて、神の御計画の実現の時は人間の年月の数え方では計れないと思うようになって行った後にも、教会は神の国の信仰を決して捨てはしませんでした。

パウロはここで、これは自分の一つの意見であるが……、と前置きして書いているのですが、それを読むと私たちは、当時の教会が使徒たちから聞かされて信じていた福音と信仰を理解することが出来ます。「兄弟たち、わたしはこう言いたい。定められた時は迫っています。……この世の有様は過ぎ去るからです。」(w.29,31)

3. マコ

この福音を、マルコ福音書は「神の子イエス・キリストの福音」(1:1)と語っています。

教会は、“キリストの祭壇を囲んで、私たちの救い主の死と復活の記念の祭儀であるミサをささげる群

なのだ”ということが、第二バチカン公会議後の典礼刷新によって明らかにされました。1956年、当時の教皇ピオ12世が典礼刷新にあたって、「聖霊が人々を恵みの泉に近づけようと、現代の教会を訪れてくださったのです」と述べられたとおりです。

私たちに“罪のゆるし、からだの復活、永遠の命”を与える十字架のいけにえを、教会はイエス・キリストが再び来られる終りの日まで、これからもミサにおいて記念して行きます。神の子イエス・キリストの十字架と復活を信じる信仰……、それが福音への信仰であり、その福音は神の国の福音なのです。

vv.16-20 イエスが最初の弟子たちを招かれると、彼らは「すぐに」「……捨てて」「……残して」従いました。マルコ福音書はここで、“神の国の福音のために使徒となる……”とはこういうことなのだ」と説明しているのです。

私たちは皆、この世の生活、この世の仕事、この世の人間関係などに関わって歩んでいる者たちです。また私たちは使徒でもない。司祭の司るミサに参集するただの会衆に過ぎません。でも、そんな会衆の一人一人にとっても、神の国の福音と、主の死と復活の記念の祭儀であるミサとは、この世のどんなものにも勝って大切なもの、“罪のゆるし、からだの復活、永遠の命”を与えるものなのです。

「神の小羊の食卓に招かれた者は幸い。」

「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠のいのちの糧、あなたをおいてだれのところに行きましょう。」(拝領前の信仰告白) ハレルヤ、アーメン。

1月30日 年間第4主日

申 18:15～20 | コリ7:32～35 マコ 1:21～28

1. マコ

vv.21-22 「人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。」

このような主イエスに、私たちもお会いしたいと思います。私たちは漠然と信じているのではなく、権威ある者としてお教えになる主イエスに出会って、私たちが受けている救いについてもっとしっかりした確信を持ちたいものだと思います。

vv.23-28 「人々は皆驚いて、論じ合った。“これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。”」

現代の教会が、この驚き・・・神の子イエス・キリストの力ある救いに与かる驚き・・・を体験する教会となるために、第二バチカン公会議は典礼憲章を定めて、典礼刷新の基礎をおきました。全世界の教会は今、その典礼刷新の中を歩んでいるのです。

ミサで聖書が朗読されることについては、「信者に神のことばの食卓の富を豊かに与えるために、聖書の宝庫を今まで以上に広く開かなければならない」(典礼憲章 51)と規定され、そのおかげで私たちは今朝も、定められた三つの朗読を聞くことが出来たのです。

さらに会衆がそこから神の呼びかけ、神の語りかけを聞くことが出来るように、典礼憲章は「典礼の暦に従って、聖書に基づいて、信仰の秘義とキリスト教生活の諸原則を説明する説教を、典礼そのものの一部として、大いに奨励する」「特に、主日と守るべき祝日に、……ミサ聖祭において、説教を重大な理由なしに省略してはならない」と決めました(同 52)。

私たちが今朝、マルコ福音書からの朗読を通して聞いたガリラヤ湖畔カファルナウムの会堂での人々の体験は、説教を通して今日の私たち自身の体験となります。なぜならこの福音書で物語られている主イエスは、私たちが今朝このミサでお会いし、その御聖体に与かるイエス・キリストと同じ方だからです。私たちも今朝、この同じ神の子イエス・キリストにお会いして、その権威ある教え、権威ある救いに驚くのです。それが私たちのミサなのです。

2. 申

第二バチカン公会議から始まった典礼刷新の大いなる貢献は、“ことばの典礼”と“感謝の典礼”という二つの部分が、ちょうど長円の二つの中心のようにしてミサを構成していることを、再び明らかにしたことです。ミサ典礼書の総則の第二章が「ミサには、神のことばとキリストのからだの食卓が用意され、信者はそこで教えられ、また養われる」(総則 8)と述べているとおりです。

v.15 「あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。

あなたたちは彼に聞き従わねばならない。」

この言葉はかつての古きイスラエルにおいて非常に重視されて来たものでした。イエスが公の生涯を歩み始められた頃、人々の間にはもしかするとこのイエスがあゝの「預言者の一人」かもしれないという期待がありました(マコ8:28)。

しかし私たちは今朝、この申命記の言葉は私たち現代の教会に向かっても、今なお有効に語り続けていることを知ることが出来ます。「わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。」(v.18) まさに私たちのミサの中のことばの典礼で、神は司祭を説教を語る者、神のことばの預言者として用いることを始められたのです !!

このことは長いキリスト教の歴史から見れば、まだほんの緒に就いたばかりで、実情はかなり未熟であるとしても、「聖霊が人々を恵みの泉に近づけようと、現代の教会を訪れてくださった ……」(ピオ12世)のであれば、必ずこれから成長して行って、よりよく用いられるようになって行くことを信じる事が出来ます。

vv.19-20

人々が救い主イエス・キリストを信じるようになるため、そして信仰によってキリストの死と復活に与かる者となり、やがて実現する神の国に復活してこれを受け継ぐ民として、主日のミサを喜びと感謝をもってささげて歩むために、神は司祭に“感謝の典礼”とともに“ことばの典礼”を司り、その中で説教することを始めさせてくださったのです。

3.

会衆は、私たちのミサを司式する司祭たちのためにも祈りましょう。彼らがより良く委ねられた務めを果たすことができるように …… と。

また会衆は、将来の司祭を主が私たちの中から起こして下さるように祈りましょう。多くの人々は世のことに心を遣いながら、その中でせめて主日のミサでは主のことに心を遣いますが、神が選び神が育てて下さる司祭は、その生涯を主のことに心を遣うためにささげます。そのような司祭を私たちの中からも起こして下さる …… 、そのことを今朝の聖書は私たちに期待させてくれるのです。

ハレルヤ、アーメン。